

【ねがいはましては】

平成27年6月25日

KYOWA SCHOOL

第296号

「メッセージ」

詩人、吉野 弘さんの作品です。

奈々子に

赤い林檎(りんご)の頬をして 眠っている 奈々子。

お前のお母さんの頬の赤さは そっくり 奈々子の頬にいつてしまって ひとところのお母さんの つややかな頬は少し青ざめた お父さんにも ちょっと 酸っぱい思いがふえた。

唐突だが 奈々子 お父さんは お前に 多くを期待しないだろう。

ひとが ほかからの期待に応えようとして どんなに 自分を駄目にしてしまうか お父さんは はっきり 知ってしまったから。

お父さんが お前にあげたいものは 健康と 自分を愛する心だ。

ひとが ひとでなくなるのは 自分を愛することをやめるときだ。

自分を愛することをやめるとき ひととは 他人を愛することをやめ 世界を見失ってしまう

自分があるとき 他人があり 世界がある。

お父さんにも お母さんにも 酸っぱい苦勞がふえた。 苦勞は 今は お前にあげられない。

お前にあげたいものは 香りのよい健康と かちとるにむづかしく はぐくむにむづかしい 自分を愛する心だ。

(本文をそのまま引用)

私がこの作品で最もところを打たれる一行が、『お父さんは お前に 多くを期待しないだろう』です。

心からご両親を尊敬している子どもであれば、なんとかその期待に応えるべく努力を重ねます。しかし、相手は現実、結果がそのすべてを物語ってしまうかのように受け取られてしまいます。自然とわき出る自分への嫌悪感。「自分はだめなんだ。」「自分なんていないほうがいいんだ。」「自分なんて大嫌いだ。」

まじめすぎるが故の自分への攻撃が始まります。『ひとが ひとでなくなるのは 自分を愛することをやめるときだ』つまり、子が自分自身を愛することをやめてしまうことは、人でなくなること。その原因は、親の子への期待。少なからず、親は子へ一抹の期待を描きます。子はその期待をととても大きなものとして捉えてしまったとき、徐々に自分への攻撃を始めているのかもしれませんが。

自分を愛することの出来ない状態は、当然、他人を愛することなど出来ません。やがて、子の心は親から離れていきます。押さえきれないほどの強い孤独感が子を包み始めます。やがてやってくる、真の孤独。

常に子は、ご両親に認められたい、ご両親から褒められたいと思っています。それは愛情を求めている証拠です。その“褒められたい”を最も強く意識してしまうのが“成績”です。“しかられたくない”からやってくる自然な心理です。

『お父さんが お前にあげたいものは 健康と 自分を愛する心だ』

まさに今の教育が忘れてしまっているようなことのように聞こえてしまいます。

自分を愛する心、「今日も精一杯に生ききっているな、家族はみんな元気だし、明るいし、お母さん、お父さん、ありがとう。これからもよろしくね。」

家族全員に広がる安心感。愛情をたっぷり吸った空気に満ちあふれている空間・・・家族。そんな空間で宿題に励む子・・・。そんなお子さんに“成績”などという感情が湧くのでしょうか。成績がちっばけに見えます。

この小さな空間（教室）が、子どもたちにとって、安心に包まれた空間であり続けることを、改めて心に刻ませていただきました。それにはあなた方の協力が必要です、笑顔をよろしくね。吉野さんありがとうございます。

お父様、お母様に、お願いがあります。ご自身のお子さんのお名前に変えて、この詩を読んであげてください。